花咲か爺さん

北相木村診療所　松橋　和彦

　北相木村の桜は色の鮮やかなオオヤマザクラ、数日早めに咲くヒガンザクラ、小学校にはソメイヨシノ、沢沿いに房状の白い花を咲かせるウワミズザクラなど種類が多い。オオヤマザクラなど例年ならば大型連休の初めに見頃を迎えていたものが、今年は四月十日過ぎには咲いてしまい、温暖化もここまでと皆驚いている。

山に咲く桜

　桜といって私がいつも思い浮かべるのは花咲か爺さんの話である。花咲か爺さんはとにかく不思議な人だ。何が不思議かというと、彼はヒーローではないのである。何か大発見をして社会に貢献したわけでもないし、自分を犠牲にして村を救ったわけでもない。また枯れ木復活の超能力を身につけるため、厳しい修行を積んだわけでもない。ただただ正直に平凡に生きてきた、ごく普通の一般庶民である。その人が晩年に花を咲かせてしまうのだ。これはいったいどういうことなのか。

訪問診療で話を伺う（本文の内容と関係ありません）

　生きるとは特別なことなんかじゃない、こつこつとまじめに生きる、それだけでいいんだ。それこそが花なんだ。この昔話は、私たちにそう伝えてくれているのだと思う。

　診療所では折に触れて、患者さんにこれまで生きていた道のりを伺うことにしている。あなたは何処で生まれ育ち何をしてきて、そして今私の前にいるのかと訊く。

「学校まで往復四時間かけて歩いて通ったよ。」

「炭焼きの品評会で一等賞とったよ。」

「満州から帰って来る時は大変なんてもんじゃなかったよ。」

　思い出してくださるままに支持共感して傾聴する。患者さんが人生を振り返り、自分は頑張ってきたじゃないか、いろいろあったけれどこれで良かったのだと思えるようになってくださったらこの上ないことだ。お話を受け入れ、肯定的に聴くことによって話す人の自尊心は確実に高まる。

　私はお年寄りに対する傾聴は、長い時間を生きてきた一人一人を花咲か爺さんにすることなのだと思う。

桜を背景に